

地域コミュニティの 防災力

連載 第17回

防災とコミュニティ — 地域コミュニティの要としての学校の役割



1. 学校は地域コミュニティの拠り所

東日本大震災で、在校していた生徒全員が津波から命を守ることのできた釜石東中学校をはじめとして、本震災で死者を一人も出さなかった学校、幼稚園、保育園は多数存在します。災害から子供たちの命を守ることは、学校にとって重要な責務の一つですが、学校にはそれ以外にも様々な役割があります。

1995年に発生した阪神・淡路大震災時には長期間にわたり、学校が被災者の避難場所となりました。この災害以外にも、風水害や火山噴火などさまざまな災害が発生したときに、地域住民の生命の安全と避難生活を守る場所として学校が機能しています。

何か異常な事態が起こったときに、地域住民が最も信頼し拠り所にするのが学校です。ではなぜ地域住民にとって学校が災害時の拠り所となるのでしょうか。それは学校が持つ「安全な場所を提供してくれる学校」、「大切な子どもたちへの教育機能を有する学校」、「地域住民の信

頼を得る先生」という条件によるものなのです。

話は古くなりますが、明治維新で天皇が京都から東京へ移られたとき、京都の人たちは一念発起して、地域の中にたくさんの小学校をつくりました。そこには単に子どもたちへの教育を行うだけでなく、疫病に対する予防接種を行う場所として、あるいはさまざまな地域社会の安全と安心を守るための機能を付加したのです。小学校を中心に地域を盛り立てていこうとした試みは、今なお京都におけるコミュニティの単位を「学区単位」とすることで残っているのです。

また“先生”の存在も地域にとってはきわめて大切な存在として認識されています。たとえば災害時に避難所となったある学校では、「校長先生は歩く秩序」と言われていました。避難生活が長引く中で、避難者の心はだんだん苛立ってきます。中には怒鳴りあいや殴り合いをする人もおりトラブルが絶えない避難所の中で「校長先生がそう言うのなら聞こうじゃないか」という声上がるようになりました。

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

またトラブル解決には3つのポイントがあります。一つ目は「トラブルが起こる前にこちらから出かけていく」ことです。この校長先生は毎朝、必ず学校の中をぶらぶらと歩きながら避難者の表情を見て、何かトラブルが起こる前に声をかけることを続けました。二つ目は「相手の話をとことん聞く」ことです。どんなに怒っている人でも、黙って1時間話を聞いてあげれば怒りが収まります。そうすると今度は、こちらの話を聞く耳を持つてくれるのです。三つ目は「できることとできないことははっきり伝える」ことです。できないならできないとはっきり答えてもらえれば、相手は次の対応を考えることができます。ところが曖昧な返事をして結果的にできないとなると相手は怒ってしまうのです。

これまで大規模災害が発生した時には、多数の学校の先生たちが避難所の運営に苦勞されてきましたが、モンスターペアレンツなどと呼ばれる保護者が出現した現在でも、学校の先生は社会の規範や規律を象徴するものとして、地域住民に捉えられているのです。



2時46分で時が止まった名取市閑上中学校

2. 日頃の連携が災害時の連携を可能にする

災害時には、地域コミュニティの要として非常に重要な存在となる学校ですが、平常時でも地域コミュニティと学校が連携すれば、さまざまな課題が解決されることが明らかになっています。たとえば東京にある世田谷区立太子堂中学校では、一時全国的に問題となった荒れる中学生対策として、防災をテーマとして地域社会と連携しました。地域の人たちと一緒に防災訓練を行ったり、学校を開放して宿泊体験をしたり、さまざまな取り組みを通して、地域の人たちの目が学校へと向けられるようになったのです。

それまでは中学生に無関心だった地域の人たちですが、子どもが道端でタバコを吸っていると、誰かが必ず注意してくれます。自然と中学生たちの心も落ち着きを取り戻し、それまでのような中学生のトラブルはついに解消されました。

普段から地域コミュニティと学校との間にこのような連携があれば、いざ災害が起こったときにもおのずと助け合いの関係が生まれてきます。先に述べたとおり、学校は今も地域社会の誰もが心の拠り所にする場所です。地域社会を構成している企業、行政、その他さまざまな組織との顔の見える関係を、日ごろからどれだけたくさん築いておくかが、災害時にも、そして平常時におこるさまざまな問題を解決するためにも大切なことなのです。



1階天井まで浸水しながら避難所となった
石巻市湊小学校

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

3. 教育の場を守る

災害時には学校＝避難所という認識を持たれている方が多いようですが、当然のことながら学校＝教育の場なのです。これまで災害が発生するたびに、被害を受けた学校が最も力を注いできたのが「教育の再開」でした。

学校が再開されるということは、子どもたちが秩序あるいつもどおりの生活を取り戻す第一歩となります。災害は子どもたちにとって日常とは異なる異常な生活を強いることとなります。このような時間が長く続けば続くほど、災害が子どもたちの心に与える悪影響は強くなります。いつもと同じ時間に起き、学校に通い、

先生や友だちと共に学ぶというごく当たり前のことが、心の秩序を取り戻すためにはきわめて重要なことなのです。

また学校の再開は、子どもたちだけでなく、地域社会にとっても大切な意味を持ちます。学校が始まり子どもたちの通学する姿を見ることによって、大人たちにも災害からの復旧や復興に対する意欲が高まってくるからです。

学校という施設が安全な避難場所であると同時に、子どもたちにとって何より重要な学びの場として、教育が途切れることなく継続されるために、地域コミュニティの全ての人たちが協力することが強く望まれます。